第３種郵便物認可

日刊工業新聞
THE NIKKAN KOGYO SHIMBUN
11月22日火曜日
2016年（平成28年）

（日休刊）　昭和１５年８月１７日第３種郵便物認可

不撓不屈（ふとうふくつ）

生物資源研究所 ①

沖縄の素材で抗がん剤

ウイルス研究者 畑違い転身

沖縄本島北部、山原を意味する〝やんばる〟と呼ばれる地域に、医薬品開発を目指す小さな研究施設がある。その名は生物資源研究所。根路銘国昭が所長と社長を務める私設研究所だ。

センダンを利用

77歳の根路銘は国立感染症研究所に長く籍を置き、世界保健機関（WHO）のインフルエンザ・呼吸器ウイルス協力センター長も務めた経歴を持つ。しかし現在は、畑違いのがん研究に力を注いでいる。自然豊かな沖縄の植物を使い、副作用のない抗がん剤をつくる。これが根路銘の使命だ。

沖縄県名護市内の本社を兼ねた研究所の入り口では、建物を守る沖縄の魔除け獅子「シーサー」が口から水を噴き、来所者を迎える。その奥にアーチのように茂る樹木がセンダンだ。現在、この植物を使った医薬品開発に奔走している。

センダンは沖縄では風土に根付いた樹木。温暖な地域に自生する広葉樹で、薬効や毒性がある。適切に使用することで殺虫効果などを発揮する。女児が生まれるとセンダンを植え、嫁入りが決まると、その木を削った板で、たんすをつくる風習もあったという。その自然の効果を利用し、特効薬とすることが生物資源研究所の事業だ。

経口摂取が目標

所内は根路銘を筆頭に、常務で妻の令子、研究スタッフ4人に事務スタッフと大所帯ではない。しかし規模は小さいながらも、壮大な目標とのギャップを楽しむかのように根路銘は「沖縄一小さな研究所」と自称している。

生物資源研究所の入り口には魔除け獅子シーサーの噴水があり、センダン（左奥）も茂る

最終目標と

する医薬品は、注射ではなく経口摂取により投薬する抗がん薬だ。医薬品とするには超えなければならない多くのハードルがある。地域資源のセンダンを研究する場を故郷の近く、名護市に定めた。

名護市を本拠に

根路銘は研究所のある名護市に近い本部町の出身。亜熱帯気候の沖縄県でも、北部は特に山深い。その自然が持つ力強さを身にしみて感じていた。そのためウイルスから「足を洗って」、がん品化することには成功している。

根路銘が、がん分野に転じて十数年になる。当初は30年以上におよぶウイルス研究の第一線でのキャリアを経ても、がん研究は未知の領域だった。医薬品の開発をゴールに定めたとしても、まず素材となる植物を見つけなければならない。がん細胞だけでなく、自分との戦いも始まった。

（敬称略）

▽所在地＝沖縄県名護市中山893の2、0980・54・3376▽社長＝根路銘国昭氏▽従業員＝8人▽設立＝04年6月▽資本金＝3000万円▽売上高＝9102万円（16年3月期）▽URL＝http://ibr.okinawa.jp